

“今ここ感”の創出
 — 「他者と他者の不在」との遭遇 —

21818017 小口 真由
 指導教員 宮 晶子 准教授

孤独 地縁 都市
 移動 遭遇可能性 他者の不在

1 背景と目的

幼い頃から、高速道路から見える知らない人の家に灯る小さな“生活光”を見るのが好きであった。この他者の生活光を見ることで間接的に他者の存在を感じることは、「今わたしは確かにここにいる」ということを強く意識させてくれる。この経験を言語化し形にすることで新しい都市のかたちを提案できるのではないだろうか。

私は現在、同じような部屋がいくつも積み重なった集合住宅の中に住んでいるが、隣人の顔も名前も知らない。沢山のひとと集まって暮らしているのに、誰とも交流がなく、誰の名前も分からないという生活を送っている人は都市部に多い。地元を介した交流がなくなり、自分の住む町での移動が家から駅の往復ばかりになった現在、自分の部屋だけがどこにも属さず浮き島のように浮いているような孤独感を抱く。このような孤独を抱いている人々に対して、「今私は確かにここにいる」と感じられる建築を提案したい。

2 都市での孤独

2-1 孤独

OECD 経済協力開発機構の調査によると、日本は先進国の中で最も社会的孤立度が高いという。しかし様々な社会的地位、住環境、年齢などによるパターンを考えると、孤立しているから孤独であるとは言い切れず、反対に孤独であるから孤立しているとも言えない。

2-2 地縁の喪失

都市へ働きに来た人、地方から出てきた学生、多くの核家族、永く同じ土地に住んでいる人、それぞれが異なった自己形成空間を持っており、それにより各々の都市感覚を持っている現代の都市では、自分だけが孤独であると感じている。自己形成空間を別の場所に持っているという意識は、現在の都市での暮らしに対する仮住まいの意識が誘発したと考えられている。また、都市中での通勤通学路は時間的事情により必要最小限に合理化され、いつも同じ一つの道を通るのみとなった。こうして自分の住む町での移動はその一本道でしかなくなり、それ以外の自分の住む町のことを知らないのである。

3 “今ここ感”とは

本制作では、他者の生活光や街を歩いていて漂ってくる生活の匂いから間接的に親しさを感じたり、地域との関わりからその場にいる私の存在を強く感じたり、私は今確かにここにいると感じられる経験を、“今ここ感”とする。まず“今ここ感”を大きく対人的次元と非対人的次元の2つに分けて分析していく。

3-1 対人的次元

銭湯に行くといつもいるおばあちゃんとの遭遇などその場所でしか会えない人たちとの深入りしない緩やかな連帯感が今ここ感を感じさせる。そこに住む期間の長さはあまり関係せず、家の外の生活領域を広げ、選択的に深めることや、趣味や嗜好などイベント的な関りではなく、日常の風景を介した「他者との遭遇」が重要である。

3-2 非対人的次元



図1 窓からとる他者の生活光



図2 他者の存在を感じる痕跡

(出典 アリストテレスルーファニス)

夕飯の匂いが漂ってきて親密感を感じる時・窓から他者の生活光がともっている時・細く壁に囲まれた道を密着感を感じながら歩いている時・今ここにいながら現在と異なる他者の時間の相を想起し、重ね合わせることで「他者の不在」を感じ取る時など、直接的な他者との関わりは無くとも、視覚・聴覚・嗅覚・筋肉の動きから私は今確かにここにいると感じられる現象を非対人的次元での“今ここ感”とする。

上記のように非対人的次元で“今ここ感”を覚えた経験を、都市スケール、建築スケール、人スケールで収集し簡約化してスケッチすると、反転、誇張、痕跡、密着に類型化することが出来る。

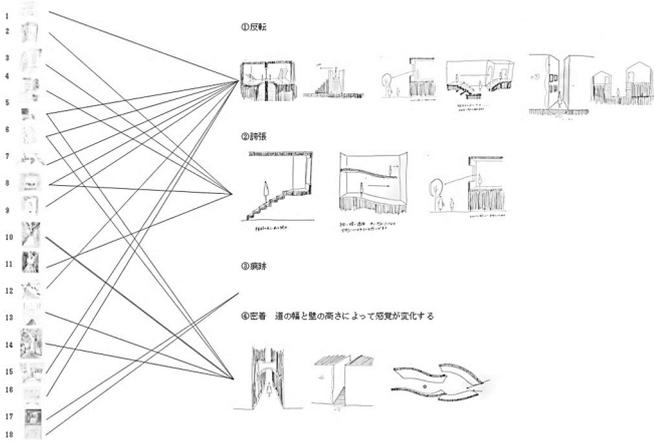


図3 抽出した今ここ感の分析

<p>反転</p> <p>他者の生活光を見たとき、窓によって他者の生活の内側が切り取られたときに、自分を取り巻く見えない膜が消え、今私は誰かにとっての外側なんだと気づく。自分の現在位置の反転。</p>	<p>誇張</p> <p>意識の中での内と外と、認識の中での内と外を、境界を乗り越えていったり来たりすることで、幾何学的でない境界が創造され、自分の存在、位置を意識させる。</p>
<p>痕跡</p> <p>今ここにいる自分に流れている現在の時間と、ここにはいない他者の異なる時間の相を想像し重ね合わせることで、他者の不在を感じとる。その感覚が逆説的に“今ここ”を感じさせる。</p>	<p>密着</p> <p>細い路地に入り込んだ時、他人の家に入り込んでしまったような緊張感と共に空間に包まれるような圧を感じることで、世界の中の自分の位置を把握するように今ここにいる自分を感じる。</p>

図4 設計手法

これらを“今ここ”を感じる4つの設計手法とする。

3-3 3つの他者キャラクター

都市で過ごす他者の人々の特徴は大きく土着者、漂流者、流動者の3つに分けられると考える。ひとつは、その土地に長期定着し、これからも住み続ける土着者。それに比べてその土地に暮らす期間が短く、仮住まいといえる漂流者。そして仕事や観光でふらっとその街を訪れる流動者。そのなかで、仮住まいの漂流者は自分の住む町にコミュニティーを持ちにくく孤独を感じやすい。そのため、土着者と漂流者の場を通した関わりが、地縁を生み、そこに生活している実感を感じられると考える。都市部で交わりにくくなった土着者と漂流者を引き寄せる存在が流動者である。その土地に縁はなく、訪問した場所の風景に対して目的を持たずにさまよい歩き観察し、その場その場で偶発的なコミュニケーションを生むことで、都市空間での他者との出会いを誘発するだろう。

4つの設計手法と他者との出会いを誘発することによって、“今ここ感”を創出していく。

4 設計提案

4-1 敷地

現代の都市において、対人的次元、非対人的次元から「今ここ感」創出する建築を作ることが出来る場所を調査した結果、東新宿に非対人的次元で抽出した要素と共通する風景が多いことを見出し、新宿7丁目東新宿を調査の対象とする。新宿区は23区の中で単身世帯が最も多く、対象地域も例外なく単身者用アパートが多く建っている。東新宿は路地が多く飲食店なども混在する高密度な住宅地であり、土着者と漂流者が混在しながら生活している。しかし各住居は塀や目隠しなどを使っており閉鎖的で交流は無い。近年は大きな集合住宅が建てられ、東新宿が持つ非対人的次元での“今ここ感”の一つである路地性が減少している。街が持つ“今ここ感”の質を保ちながら街を更新していく未来を提案する。



図5 新宿七丁目

4-2 提案

賃貸集合住宅とホテルを設計する。従来のBOX型の集合住宅は、敷地に対して大きくボリュームを取り、閉鎖的で周囲の環境が入り込む余地がない。そのため東新宿の路地性を引用したチューブ型にし、周辺の路地を引き込むように敷地に這わせることで、従来のBOX型のように大きなボリュームを取りながらも東新宿の持つ路地空間をチューブ自体、さらにチューブとチューブの間や、既存建物との間に増幅することが出来る。漂流者のチューブと流動者チューブの間に生まれる土着者が入り込める公共的な路地が交錯することで、他者との遭遇を誘発する。

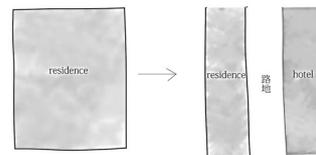


図6 ダイアグラム



図7 コンセプト模型

この地域に根差せていないという孤独を抱く個人が、銭湯やコンビニエンスストアなど分散した生活機能の拡張施設を利用し、土着者や漂流者、流動者と遭遇する経験をしたり、他者の日常の風景や「他者の不在」を感じることで“今ここ”を感じられる空間を目指す。

主要参考文献

- 東浩紀 『ゲンロン0 観光客の哲学』 株式会社ゲンロン 2017
- 奥野健男 『文学における原風景』 集英社 1972
- 南後由和 『ひとり空間の都市論』 ちくま新書 2018